数という平等

——非日常の中の日常：1995年西宮（9）——

原　田　隆　司

Equality and Number : Ordinary Lives in Extraordinary Situations in Nishinomiya, 1995 (9)

HARADA Takashi

Abstract : This is part of a study on social situations after the Great Hanshin-Awaji Earthquake in 1995. This paper focuses on the human relations in a public shelter located in a municipal junior high school in Nishinomiya. This shelter lasted for eight months. At the beginning of January, it was just an aggregation of evacuated people. At that moment, they were treated equally because they were just regarded as a number. From then on, space for the shelter in the school was gradually limited. Certain people were nominated on to the list and we, volunteers, sent these refugees to the municipal headquarters so that they could receive a regular service of food and drink. The act of labeling 'the public shelter' had the result of distinguishing the space and the refugees from the rest of the people in the affected area. This process created inequality between people evacuated by the same earthquake.

1995年1月17日の地震発生直後から8月下旬まで，避難所が存在した。僕自身の個人的な経験を通して，この「避難所」というものについて考えてみたい。

1．4ヵ月後

僕が「ボランティア」として通ったのは西宮市内にある公立中学校の避難所である。以下の引用は，当時のメモからの抜粋であり，［　］内は，今回の引用のために説明のために付け加えたものである。

5月4日（水）

曇，夕方より雨。自転車で9時40分，H中着。職員室の廊下で用務員さんが迎えてくれる。M先生が鍵をもってきてくれる。I先生［がやってくる］。

10時前，教頭先生よりtel。(1) グランドの車を体育館のほうに寄せたい。(Tさんのワゴン，H君の車) NさんのもTさんのテントの北へ動かせないか。(2) 毛布の交換希望枚数：外の紙に書いてある分を数えると47枚。［ボランティアの］SEさん来る。

11時，物資。プリンスメロン2人に1つ，ほたてのほぐし身，パン，カップヌードル。11時半，Yちゃん［避難所にいる高校生］。

1時頃，［ボランティアの］OYさん。Uさん宛の宅急便。雪印オリゴのミルクをもらいに来る人。牛乳5個の人［決まってもらいにくる人］。

4時，［ボランティアの］Aさんから電話，教育委員会の人の悪口をいう。弁当80個。「これ飼ってください」と小学生が子猫5匹を洗面器に入れてもってくる。うち［避難所］の子どもたちが犬を連れてシャンプーとタオルが欲しいとやってくる。［時折やってくるボランティアの］Mさんが［パソコンの］通信ログの保存方法を教えてくれる。6時に出る。雨がかなり降っている。

5月5日（金）

9時45分，最高の晴天，爽やかな風の中，到着。Uさんにお皿2枚返す。SEさんとM先生が神戸の長田へ

物資を持っていく準備をしている。Aちゃんが来る。明日，Sさんのところ［Aちゃんの家族］は引っ越すとのこと。

10時半，物資（いちご，カップコーンスープ，パン，みつばとあさり）。Aちゃん，Yちゃんと冷蔵庫の野菜室を掃除する。Mさんのご主人が大きい段ボールを取りに来る。Kさんが米［をもらいに来る］。

11時30分，東京のSUさん［元ボランティア］から電話（江東区のマンション8階）。12時50分，Mさんが段ボール［をもらいに来る］。Kさんが，他人丼と，あさりとみつばのすまし汁を作って持って来てくれる。［避難所の外の］女の子が牛乳7個［もらいに来る］。

13時20分，県のパトロール。西宮の避難所以外で生活している人の状況はどうなっているのかを知りたい，と伝える。

14時，弁当80来る。食料庫は少し暖かくなりつつあって心配。講談社の人が「阪神大震災の本を出す計画があり，避難されている人とボランティアとの関係なんかを聞きたい」というので，「ここは生活の場ですから」といって断わる。Kさんの所へお椀を返しにいくと，Hさんたちが集まっている。

表彰すべき団体のリストをパソコンで作る。ノートを見ると，あったことが集約されて整然と並んでいる。

4時過ぎ，M先生，SEさんが帰ってくる。長田では，水道水が飲み水としては認められず沸騰させているという。12階建てのマンションには，「私たちは，水道もガスもない所で頑張っています」という横断幕。Hさんがガムテープ［借りにくる］。5時15分，食事の仕分けに「寝不足や」というTさんが来ている。何かうれしい。Mさんが近所の人からもらったという3合炊きの炊飯器を持ってきて，米を入れる。6時半，『ライ麦畑でつかまえて』をYちゃんに置いて帰る。

5月12日（金）

朝から大雨。9時20分，バス停のところでタクシーを拾って，メーターを途中から入れたため，600円で9時45分に着く。職員室の前で，他の先生がアメリカからの手紙を掲示しているところに，教頭先生が立っている。鍵をもらい「駄目でしたね」というと「誰が当たったか教えて」と二人で中へ入って教頭先生の机の上で，リストに赤鉛筆で○と＝を引く。厳密にいうと（今，籍だけの人を除くと）40人くらいで，卓球室が空けば（昨晩のSさんの話しでは，どこかに出ていくかも知れない）MさんとOさんの所に入ってもらえば，後は格技室（「格技室はKさんの所だけか」）で大丈夫ではないかという。

10時5分前，本部を開ける。外からいつもの「奥さん」が「パンか何かありますか」というので，［2家族用にとってあった］セットのうち弁当1つだけはずして全部渡す。

以上は地震から約4ヶ月が経過した頃の様子である。

中学校としては普通に授業が行なわれていた。ただ，体育館が使えないということとグランドの隅に車があるということを除いては。そこに，AさんとSEさん，そして僕の3人の「本部の人」と呼ばれる「ボランティア」が，担当日を決めて通っていた。朝10時くらいに職員室で鍵を借りて，体育館の1階の「本部」の鍵を開ける。約40名が暮らす場所としての避難所には，毎日物資と弁当が人数分だけ配達されてきた。それを受け取り伝票にサインすることが最重要の「仕事」であった。「本部」には，日用品や衣料，ストックできる食べ物や飲み物があるために，避難所の人だけでなく，「外」からももらいに来る人が居た。そのほとんどは決まった人たちである。さらに，やっと西宮以外のところの様子が気になりはじめ，余っている物資を運びはじめたところである。

避難所の「中の人」たちは，ここから学校や仕事に通っていた。宅急便も配達されてくる。そして「本部」は夕方6時に閉める。後は，警備員さんが宿直する。

この頃に仮設住宅の抽選結果の発表があり，それが物資の配達と同じ便で避難所本部に運ばれてきたために，教頭先生も僕たちのほうから教えてもらうという格好になった。学校側としては，仮設住宅への移動によって人数が減れば，全員に1階に移動してもらい，2階のフロアーを空けてもらいたいという意向であった。そのための算段を，ボランティアである僕と教頭先生とが行なっているのである。

「本部」にはマスコミの取材も時折あった。それ以外は「中の人」のうち僕たちと仲がいい人だけがやってきて，お昼をごちそうになったり，話をしたりしていた。今，考えれば，この頃が一番「安定」した，つまりは「ボランティア」としてすることが最小限になった時期であった。「中の人」たちが，それぞれ親戚を頼ったり，自力で賃貸アパートを探したり，また運良く仮設住宅が当たって，引っ越しをするなどして，少なくなっていたからである。それでも，しばらくは，まだぽつりぽつりと出ていく世帯があった。Sさ

んのところがそうであった。出ていくことは良いことであるのに，寂しい気がした。それほど仲が良かったのである。

2. 5ヵ月後

次にあげるのは，それから1ヶ月後のメモである。

6月13日（火）

朝，［僕の家に］Aさんから電話，パンを一緒に買ってきて欲しいと。

9時40分，H中着。Aさん来ている。体育館の人々の意向を教えてもらう。K夫妻は皆が下に降りる時に出る。Oさんも自宅のプレハブに戻るという。

10:00〜10:40，校長室，教頭先生と3人で「相談」。(1) 今度の土曜日に会議をして，6月24，25日に移ってほしいと言う。26日から7月初まで，試験をはさんでクラブの練習ができる。その後は，市教委に任せる。(2) そのために，洗濯機の移動，炊事道具の撤去，井戸の撤去，食料庫の一部を荷物置きにすること，格技室の場所割り，網戸，扇風機などの準備が必要。

戻ってくるとパンが来たところ。PTAの役員の人が来ている。僕はパソコン通信を見ている。Mさん，MIさんが，これからOさんのご主人の見舞いに行くという。Mさんが1月17日の話をしてくれる。寝ていて起きたのは何メートルも先，ご主人が出てきた後，余震で潰れた。手分けして人を引き出したので○○町は亡くなった人が少ない。

校長先生より内線電話。岐阜から神戸へ行って来たというお坊さんからの差し入れの神戸ドーナツ200個運ぶ。木工室に技術の教材来る。［ボランティアの］Oさん，教頭先生と，卓球室と格技室の寸法を測る。Kさん，手伝ってくれる。卓球室の前にあったカーテンで囲った簡易トイレ2つ撤去。板から釘を抜く。廊下にあった長机を3，4つ片付ける。教頭先生がIさんに下に降りて欲しいことを説明している。

3時すぎ弁当49。共同通信の記者（女性），遠くから来ているボランティアはいないかと。Mさん，MIさん，帰ってくる。

5時半くらいに，Mさんが来て，上の電灯の真ん中が点かないので，両側のどれかをつけるわけにもいかず，全部消して，勉強室とステージの横と階段の上だけ点けておいてもいいかというので，今はグランドにも生活している人はいないし，トイレもないし，いいのではと言う。その後，廊下で話す。土曜に会議して，次の24，25に下に降りて欲しいということになる，というと，(1) Kさんが23日に出るのなら，24-25だけでは無理。先に場所を決める線引をしてくれたら，荷物を少しずつ運んでおける。(2) Iさんは卓球室に行くのか。(3) 各家庭用のコンセントが欲しい（床おきのクーラーも何とか手に入りそう）。(4) 冷蔵庫も部屋に置きたい。(5) 部屋の中で洗濯が干せるようにしてほしい。

6時，M先生の車で，ボランティアはそれぞれの家に送ってもらう。踏切を2回通る。「ここはまた渋滞するんやなあ」。

夕刊のパソコン通信の記事で，SEさんのことが取り上げられている。彼女はきちんとやる人だ。Aさんも，中の人のことについては，きちんとしている。二人とも，よくこれだけ続けている。

そして，25日には，2階の体育館から1階への移動が行なわれた。

6月25日（日）

体育館へ上がり，床の敷物をはがす。僕が貼った強力なガムテープのせいで，床の木が少しだけはがれる。モップをかける。2時前には「体育館」になってしまう。このあっけないこと。「初めて来た時のことを思い出しますね」と校長先生に言う。教頭先生がボールを出してくれて，［ボランティアの］H君とバスケットのシュートをする。体育館である。教頭先生が鍵をかける。明日から照明の取り替え工事がはじまる。

地震の直後，取りあえず飛び込んだ校舎の教室から体育館の2階に移動し，そしてまた1階への移動。学校のなかの避難所のスペースが減少していくことは，震災後の展開からすれば，歓迎すべきことであった。しかし，その1階では夏に備えて網戸や扇風機の用意，コンセントのことなど，中学校の一部を夏に住む避難所としての設備を施せば，「体育館」からは遠ざかってしまう。

学校のすべてが避難所であった時には，どの場所も同じように避難の場であったが，その中に「中学校」の部分が戻り，それが次第に拡がっていくにつれて，限定されていく「避難所」部分は，それに反比例して長期居住のかたちを強く見せていくことになる。

最後まで避難所というものに，しかもひとつの避難所にだけ関わり，それに拘っていた僕には，出て行った人たちの暮らしについては，ほとんど知ることはなかった。また，避難所の周囲の状況についても立ち入

ったことはほとんど知らなかった。その結果，時間の経過と共に多様になっていった避難所外での生活と，この避難所とを比較することはできなかった。避難所のなかでは，人数が減り，個別の生活がはっきり見えるようになるにつれて，最初の頃との変貌が強く意識されるようになった。一軒一軒のこと，一人一人のことがはっきりと見える状況になっていった。僕たちも含めて，お互いがどういう人物であるのかが分かるようになっていた。

3. 1ヵ月後

そもそも体育館に「中の人」たちが移動したのは1月29日のことであった。6月から逆算して約5ヶ月前である。地震から2週間も立たない真冬であった。その翌々日に，僕は次のようなメモを残している。

1月31日（火）

体育館のグランド側に，昨日の毛布の入っていたダンボールを10個位ならべて「風よけ」を作る。正面入り口にも少しだけダンボールをおく。昨晩，勝手にダンボールを取っていった人は，それを頭からかぶって寒さをしのぐために使ったようだ！　断熱材は，業者から提供の申し入れがあり，2/2までに各避難所が面積を伝えるので，やってくるのは来週 or 10日後？　この零下の寒さの時には使えない！　しかし，だれがこんな大量の断熱材をストックしているだろうか。これも善意であるのだが・・・・。

昨日から話しがあり，自衛隊の車両の都合も合わせて調整して，2/1，2/4，2/7はとにかく豚汁ができるようになった！　しかし，2/7は京都から朝10時半にぜんざいの炊き出しの話があり，昼（12時）の豚汁とだぶってしまう。これも善意であるのだが・・・・2/7（火）って中学は授業をしている！

12時30分，パソコンを持ってきてもらう。「桐 Ver 4.0」で避難者リストを作りはじめる。Fさんに保健所からの伝言を伝えようとして，Eブロック，格技室，卓球室を探したけれどどこにも見つからない。昨日帰宅されていたと保健所からまた連絡が入って「解決」したが，ぼくたちはそれを把握していない。

20時20分−20時50分，［神戸の］布引から人を探しにこられたおじさん。子供2人なくなり，母親から電話をもらったが，どこの避難所でも見つからない。家の場所を書いてもらう。どうすれば見つけられるのだろうか。

職員室で，教頭先生に，ハムエッグ，かんづめ，いちごとスープ，ごはんを入れてもらう。

市教委のNさんは，「一年位続くのでは」という。避難所とは震災からの避難ではなく，家屋のない状態からの避難である？　廊下で，「いつまで来てもらえるのか」と聞かれる。

7時。給水車が帰るので7時だと思う。

2月15日（水）

11時40分頃着く。パソコンに「在住」コード，在＝1，入院＝2，転出＝3を入力しながら人数を確認しようとする。結局970位が「入っている」ということは分かるが，現在何人かは分からない！　SEさんと灯油缶に入った飲料水をペットボトルに移そうとする。手洗いの所でやろうとしたが，やっぱり外でする。はじめ缶切りで両方の角を切ってそのまま入れようとするが，こぼれてしまう。紙コップに穴をあけてロートを作るがなかなか入らない。

Aさんの娘さん，PTAの人などが居て「本部」はのんびりとしている。「昨日も電話少なかったなあー」。肉団子と野菜の炊き出し（200から1000まで食数は自由）の電話。この「避難所」に居るかどうかと，居る人への伝言の電話がほぼ半々。ブルーシートにはってある「地図」で人数を数えてくれる。196（これは昨日？）。

現在の「最大の問題」は，外の人への食事の渡し方である。ここ2，3日，届けられる600食がなくなってしまっている。つまり，400食も外の人に渡っているのだ。本当なら次の食事に回せるものがすぐに出ていってしまうし，「幕の内」（今日はサーモンフライ，スチロールの容器入り）になって更にもっといいものが出されるようになると，ますます食数は増えて，しかも次の食事にとっておくことはできない。外への食事の増加は，人手がかかることにもなる。200人弱の食数なら現在のように中の人たちで十分対応できる（しかし［ボランティアの］SUさんによれば，やっている人の中にはしんどいという人もいるという）。夕方，Aさんと校長室で，校長先生，教頭先生と相談。Aさんが昨晩考えたという，夕食時に朝食も配るという案（すばらしい！）は了承されたが，それを先生方が手伝うというのは無理だという。20日（月）から6時間授業になり，とてもそんなことは不可能と教頭先生。学校とは別にして，市教委が代表を任命し，プロパンの管理も含め独立した「避難所」とする。毎日1回は温かい汁物が出来るようにしたい。道具，協力が揃えば報告して欲しい，と校長先生。

外の人への食事の配布は，PTAを通して呼び掛け，別

に役員でなくてもいいので，5時半～6時半手伝ってもらうと教頭先生。あとは，今日のブロック長会の議事の相談。郵パック300個。水は使ってもらってもいい！！

7時ブロック長会

(1) MIさんが，体育館のほこり対策として，ダスキンのモップか掃除機を手に入れて欲しいという。

(2)「トイレに入る時には，ドアをノックして欲しい，私は鍵をかけてないので」「デパートに行ったら鍵かけるやろ」「共同生活なんやからルールを守ってもらわなあ」

(3) NGOの人が土曜日で医務室を撤退すること（地域の病院が再開している)。「言ってることがころころ変わる人がいるのよ」。NGOの看護婦さん「リストはしている」。

(4) クラリネットコンサート：2月24日午後7時。

(5) 新聞の取材には協力しない。「私たちのプライバシーに立ち入る人達は入れさせへんよ！」

(6) 水が出るようになった。目を洗う所で炊事，トイレは使えるが，簡易トイレも当分置いておく。当分飲めない。給水車もまだ来る。

(7) 鳥取温泉ツアー，希望者15名，金曜にきちんと聞く。「原田さんも行こうよ！」

(8) 旅館の日帰り入浴券30枚。金曜に希望。

［ボランティアの］W君が今晩帰ってしまう。MIさんが明日帰る。僕は明日から3日間［大学の］入試で来ない。

夕方から，H君が，日教組の［ボランティアの］人と，あれこれ相談している。「部外者」，しかも毎日変わるので僕は話をする気にもなれなかったが，8時10分まで続いたブロック長会の後，呼ばれて行くと，3月10日以降も泊り込みが可能かもしれないという。僕は，今の方向性からすれば，そしていずれ「依存」できなくなるのだから，何とか方法を考えるので，延長してもらわなくてもいいと言う。ただ，西門からバックネットにかけての掃除をして欲しいということ，そして本部で寝てもらうこと。テレビ室，本部の消灯（開閉室）時間を決めないといけないのでは。避難所から共同生活所へ。

10時半，MIさんが，巡回の歯科医さんと，格技室のおばあさん2人が慢性の病気のようで，医者に見てもらったほうがいいという話を伝える。

11時，Hさんの差し入れの豪華な弁当を2つもらって帰る。川の側で，話をする若い男女2人。

このメモからだけでも，2月の前半の時点での避難所というものが多義的であることがわかる。居る人の人数が，はっきりわからない。もちろん僕が名前を知っている人のほうが少ない。弁当は，おにぎりから「弁当」へ移行する時期であったが，「中の人」だけの分ではなくて，こちらから頼んだ数だけが配達されていた。上のメモによれば，中200，外400という状況である。食料や物資を必要な人に渡す場所として，5月とは比較にならないほど開放的であった。食べ物という点では炊き出しも沢山あった。

しかし，地震から1ヶ月が経過しようとする時点で，本部の開閉の時間を考えるようにもなっていた。それまでは，何時であってもおかしくなかった，人を捜しての訪問，問い合わせの電話，食べ物や飲み物の差し入れなどが，次第に深夜や早朝の時間をはずすようになっていったからである。また，中の人たちの生活のリズムができてきているし，僕たちのようなボランティアも，家から通うという形をとるようになり，24時間体制はとらなくなっていた。だからといって時間通りに作業をするところまでは行っていない。「給水車が来る」ので7時を知るというのは，そういうことであるし，夜の9時前という時間に人捜しのかたが来訪することもある。

NGOの医療班が撤退するということも同様の変化を示している。地元の病院が再開されつつあるのだから，大局的に考えて，無料の緊急的な措置をとる体制は必要なくなってきたということである。

「避難所から共同生活所へ」というメモは，今の時点で考えれば，僕の通っていたひとつの避難所そのものの変質と，それを取り巻く町の状況の変化，この両方を示すものである。それはいわば，社会生活ないし日常生活の文脈が「避難所」にひたひたと押しよせてくることであり，それでもなお「避難所」であり続けるとすれば，「避難所」の外の文脈と整合した理由づけが必要であるということである。公立中学のなかの「避難所」であれば，なおさらである。「避難所」に通いづめの僕には，川の側で若い男女がたたずんでいる光景ですら，場違いなものに映っていたのである。

しかし，「中の人」たちからみれば，自分たちにとって避難所を出るに値する場所が提供されない以上，居続けることは，きわめてあたりまえの状況である。総数が減少していくといっても，個々の世帯にとっては，居続けるか出るかという二者択一の問題なのだから。

そして，「1年くらいは続くのでは」という見通しもあるように，避難所の人たちを収容できる住宅の提供がいつになったら可能になるのかについて，まったく誰も分からなかった。緊急時の体制からは次第に抜

けていきつつも（それは基本的には望ましいことであるにしても），それでは避難所の終わりというものがどのようなものか，そしてそこまでにはどれだけの日数がかかるのかについては，来月一杯でおわりという噂を毎月のように聞いたが，現実には誰も予測不可能な状況にあった。水道の水がやっと出るようになり，トイレも使えるようになった。しかし，水を飲むことはできないし，真冬の体育館は，段ボールで少しでも凌ごうとする程に，寒い。学校の再開のために体育館に移動することは，それ自体が大きな作業であった。

4. 数という平等

しかしそれは，全面的に「地震の後の避難所」であった場が，学校のなかの避難所へと変貌した瞬間でもあった。ここから名前や年齢を把握して，人数を数えるという作業が本格化していったのであるから。避難所という名前の場所が，意味を変えていた。同じ場所が，次第に違った意味をもっていく。

市村弘正は，次のように述べている。

> 人間は名前によって，連続体としてある世界に切れ目を入れ対象を区切り，相互に分離することを通じて事物を生成させ，それぞれの名前を組織化することによって事象を了解する。このように「名づける」ことによって物事が生みださせるとすれば，世界はいわば名前の綱目組織として現われることになるだろう。したがって，ある事物についての名前を獲ることは，その存在についての認識の獲得それ自体を意味するのであった。（市村弘正「『名づけ』の精神史」）

名前を付けた（付けられた）ものが全体として「綱目組織」を構成することになれば，そこには自ずと「分類」という作業が生じる。中学校，仮設住宅，復興住宅，建て替え・・・・「震災後」の新しい状況を定義する言葉が次々と生まれて使われるようになると，それらと「避難所」との裂け目がどんどん広がっていく。新しいことばが生まれてくるたびに，そしてそれらのことばが組織化されるにつれ，「避難所」は古いことばとして孤立していったのかもしれない。

生物学の池田清彦は「分類と，なまえあるいはコトバは不可分の関係にある」と指摘し，次のように述べている。

> なんであれ，何かを分けるためには，何かになまえをつける必要がある。モノになまえをつけなくともモノは分けられると言うかも知れないが，でたらめに分けるのでない限り，少なくとも分ける基準がいる。基準は名とは限らないが，他人に伝えようとすると，それはただちに名になる。
>
> たとえば1メートル以上のものと未満のものとを分けようとする場合，具体的な作業では1メートルのものさしがあれば十分であるが，他人にこのことを伝えるためには，1メートルというコトバの使用は不可欠になる。

池田は（人間が作り出した人工物とは対照的な）「自然物」であっても，客観的に分類できることはないという。「事物を分類するには，自然の秩序に従うのが，最も合理的である」という「自然分類」は，現実にはありえない。もしもこの自然分類が成立するとすれば，次の2つの条件が満たされなければならない。第一は，それが「人間の都合とは無関係な自然物の名か価値中立的なものでなければならない」ということ，第二には，その分類が等価なものでなくてはならないということである。Aと非Aという分類は，明らかに等価ではなく，人間が識別できるAというものに価値をおいた分類である。こうして池田は「分類」とは客観的なものではなく，誰かの思想であると指摘する。

興味深いのは，ただひとつ「人間の感覚が識別できる基準で価値中立的なもの」が「数」であると池田が述べていることである。しかし，たとえば1メートル以上を大動物，以下を小動物とすれば，たいていの大人は大動物に，赤ん坊は小動物に分類されてしまい，私たちの感覚には合わない。こうして，完全に等価である「数を基準にする分類」という方法の最大の欠点は「我々が自然界を見てナイーブに認識する類似性，すなわち自然言語の名が，この基準と矛盾することが，しばしば起こる点に帰せられる」。（池田清彦『分類という思想』）

僕にとっての避難所での経験は，「名づける」ことによって初めて世界を認識することができ，しかもその「名前」は決して等価な付け方をなされないという，このことを毎日のように突きつけられてきたと思い返される。「避難所にいる人」と「避難所を出た人」という言い方は，等価ではあり得なかった。

5. 数から名前へ

避難所が終わった直後の1995年の9月，地震直後

のことについて，避難所にいた人のひとりと話した。そのなかに，次のようなやりとりがある。

－いちばん最初ってかなり沢山居たん？最初の数日でだいぶん減ったん？そんなこともない？

まあ３日間くらい私もボーとしてたけど私のまわりは毎日変わってた。最初に来たときはもうゴジャゴジャと居てて，あくる日になったら一組だけになって，夜中だけ来はって朝に居てへんようになってそのあと中国人のひとが来はって，４人家族，その人が何日間か居はって。

－このあいだ，Ｋさんと話してたら最初なんか「10人カケル10人で百人くらいかなあ」って。

人数ぜんぜん分からへん。いちばん最初Ｍ先生が「ちょっと人数数えさせてもらいます，あ，百人ですね」(笑)。途中からもう数えられへん（笑)。並んでないからね（笑)。これで百人居てるのかなと思た。

－それはいちばん最初？

いちばん最初名簿もなんにもない頃

－その日？　次の日？　三日目くらい？

二日か三日目ぐらい。で，ちょっと減ったから80人ずっと，お弁当いうか，おにぎりをもらってた。で，余ってばっかり（笑)。「ちょっと人数きちっとしようか」言うて，だいたい数えたら70人くらいやわ言うて。[1月末の移動の頃には] 最終的に58人分まで減ってた。あとはもう落ちついてしもた。

1月から8月までの半年以上にわたる「避難所」の存在とは何だったのだろうか。

おにぎりやペットボトル入りの飲み物，お菓子などが，24時間不定期に突如として持ち込まれ，数えるヒマもなくそれらが出ていき，求められるものは常に「在庫」が少なく，そうでないものは積み上げられていく。

そうした中から，やがて「避難者数」を報告することが求められ，上述のように「外の人」にもわたるものとして食数が積み上げられていた。

やがて所帯の構成員の名前と年齢などが把握されて，「中の人」=「避難者」という分類によって，弁当も紙パック入りの牛乳も，プリンスメロンも，正確にその数だけが計算されて届けられるよう僕たち「本部ボランティア」は，「中の人」「外の人」「(中学校の)先生」とは異なるカテゴリーに分類され（あるいは自ら分類し)，この過程のなかで，数をコントロールしていた。「中の人」の厳密な定義がないままであるのだから，毎日体育館で寝ている人だけでなく，食事が必要だという人の数も上積みし，また正確に届けられる飲み物のうち「飲まない」という人の分をストックして「外の人」に渡したりしていた。

最初はおそらく1000人以上はいたと推測される避難者数は，最後にはひと桁になり，最終日にはゼロを迎えた。ブロック（班）を作り会議をする，断熱材を敷く，井戸が掘られる，給水車が来る，弁当が運ばれる，差し入れが来る，炊き出しがある，温泉への招待がある，名簿をパソコンで作る，YMCAのお兄さんお姉さんが子どもと遊ぶ，洗濯機を設置する，食材が来て自炊する，「外の人」に弁当を配る・・・・避難所のなかとその近くで行なわれたことは，行なわれるべくして行なわれたことであるし，しかし同時に，行なわれなくてもよかったことでもある。分類されたり名づけられたりするためではない，ただ行なわれたこととしてあった，ことである。避難している人がいる，ということから派生させられることは，予め定義されていたことではなかった。

避難所というものが，突如として自然に発生して，避難してきた人が構成して「避難所」として管理されていく過程とは，そういうものであった。そこでは，どれだけのボランティアが必要なのかさえも規定はなく，誰かが（避難している人，学校の先生，通りすがりの人）すればいいことであり，また実際にそれを自由にできる場でもあった。学校の避難所とは，一日もはやく学校以外の公的な避難所に移動するか，自力で居住場所を探すか，遠方であれば空いている仮設住宅や賃貸マンションに入ることが求められた場である。「避難所」という名づけは，そういうものであった。

しかし実際には，およその人数（だけ）しか把握できないという，たとえそれが短期間のことであるにせよ，数（だけ）による「平等」な場から，学校のなかの「避難所」へと変貌し，さらに，個別の名前をもった人たちの生活の場，つまりは，継続と反復により一定のスペースが確保され，食事と飲料が規則正しく配布される場となっていった。つまり，いろいろな意味で「終わる」ことが困難な場になっていったということである。

文　献

池田清彦『分類という思想』1992，新潮社
市村弘正『「名づけ」の精神史』1996，平凡社

付記

僕は，いわゆる「震災ボランティア」の一人でありな

がら，1995年の地震とその後の状況について，約9年が経過した現在でも，自分の経験について詳細に公言することを躊躇している。これまでに，「非日常のなかの日常 1995年西宮」と題して，次のように記してきた。

（1）ボランティアの多重性，1996
（2）経験と表現，1997
（3）空間と生活，1998
（4）経験を語るということ，1999
（5）避難所の終わりと始まり，2000
（6）学校が避難所になる 2001
（以上は『甲南女子大学人間科学年報』第21–26号に掲載）
（7）水の物語，2002
（8）家を建てるということ，2003
（以上は『甲南女子大学研究紀要　人間科学編』第38, 39号に掲載）

今年（2003年）は，第二次世界大戦が終わってから58年，そして関東大震災から80年である。それらの出来事について当事者たちはどのように振り返るのかについて思いつつ，まだ10年にも満たない地震について公言することは時期尚早であるとも考えるのである。

同時に，今年度の大学3年生は「震災」の時には小学校6年生であったという。そうして，僕自身も，あの地震のことについて，日常的には，以前程には意識しないようになっていた。

しかしながら，この稿を起こすために自分の書いたメモを読み返していき，固有名詞がどんどん増えて行くに連れて，ほんの半時間ほどで，あの時のことに戻っていく。そして昔の自分と，それについて思い出している別の自分とが，次第に一緒になって，あの頃のほうから現在のほうを見つめている気分になるのである。

（2003年12月20日　未完）